

# 平成 30 年サワラ春漁の漁況予報

平成 30 年 4 月 12 日  
香川県水産試験場

## 1. 香川県におけるさわら流しさし網（春漁）による漁獲量

漁獲量の推移を図 1 に示します。

平成 18 年から 24 年にかけて年々増加し、その後 27 年まではおおむね 400～600 トンの範囲で変動しました。しかし、最近 2 年は減少し、29 年はサワラ 270 トン、サゴシ 11 トンの計 281 トンとなり、23 年以降では最も少なくなりました。

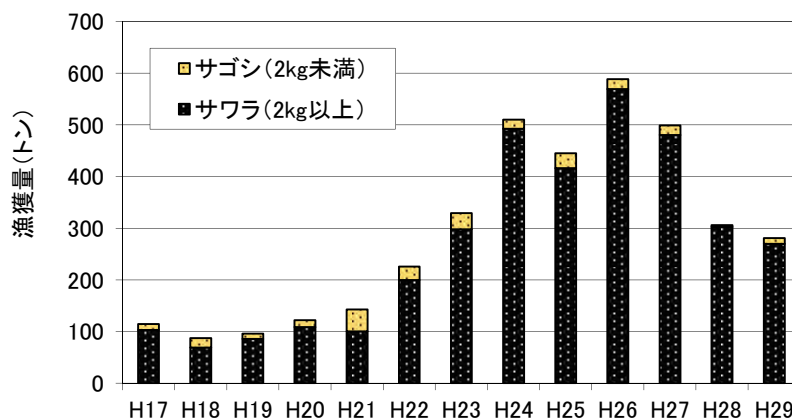


図 1 香川県のさわら流しさし網（春漁）による漁獲量の推移  
漁獲成績報告、主要漁協漁獲量報告に基づき、香川県が集計。

## 2. 平成 29 年に稚魚はどの程度発生して育っているか（0 歳魚資源尾数の推定）

国立研究開発法人水産研究・教育機構 瀬戸内海区水産研究所では、毎年度、サワラ瀬戸内海系群の資源評価を行って公表しており、サワラ 0 歳魚資源尾数（9 月 1 日時点）については、平成 28 年発生群まで示されています。29 年発生群については、香川県で得たデータから推定することとします。

瀬戸内海区水産研究所が算定した尾数と相関が高い香川県のデータとして、燧灘において 8 月に収集した 0 歳魚サンプルの平均尾叉長を用いることとし、回帰直線により推定したところ、平成 29 年発生 0 歳魚資源尾数は 1,200 千尾程度となりました（図 2）。

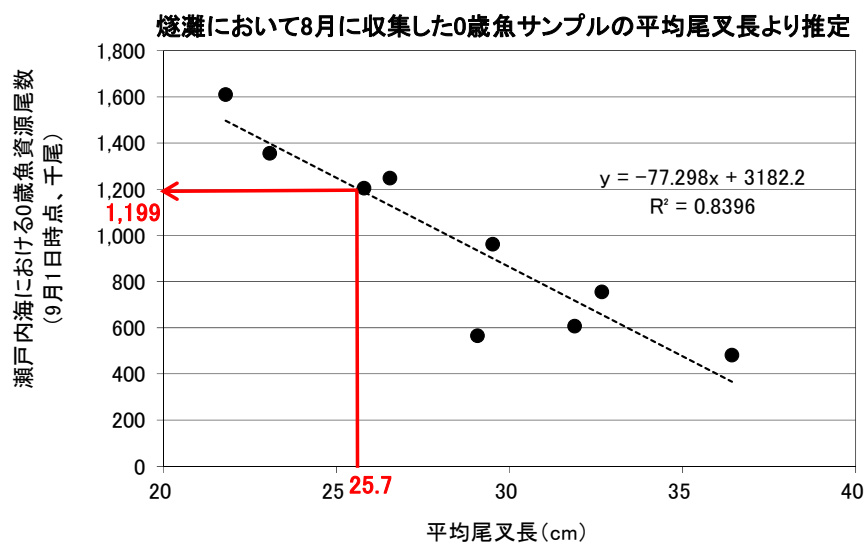


図 2 平成 29 年発生 0 歳魚資源尾数の推定

### 3. 平成 30 年春漁の漁況予測

0 歳魚資源尾数の推移と春漁における漁獲の関係を図 3 に示します。

左下の図に示すように、瀬戸内海における 0 歳魚資源尾数は、年によって変動が大きいことがわかります。

左上の図に示すように、春漁の漁獲尾数における年齢構成は、2 歳、3 歳が主体ですが、その内容は年によってかなり異なっています。

0 歳魚が多ければ、その 2 年後に 2 歳魚、3 年後に 3 歳魚、4 年後に 4 歳魚が多めに漁獲され、少なければその逆になるような相関関係があります（赤い矢印で年齢の移行を示しています）。

この関係を使って、平成 30 年の漁獲尾数における年齢構成を計算したところ、2 歳魚がたいへん多い結果となりました（28 年発生 0 歳魚資源尾数がたいへん多いため）。

重量に変換すると、右下の図に示すように、平成 30 年は 720 トン程度となり、近年で最も多かった 26 年を上回ると予測されました。

以上は、瀬戸内海全体における資源状況が香川県の漁獲に反映された場合の推定です。サワラの回遊が漁場環境や餌生物の分布等によって例年と大きく異なった場合、出漁隻日数が大幅に増減した場合は、予測と反する漁獲量になることもあり得ます。

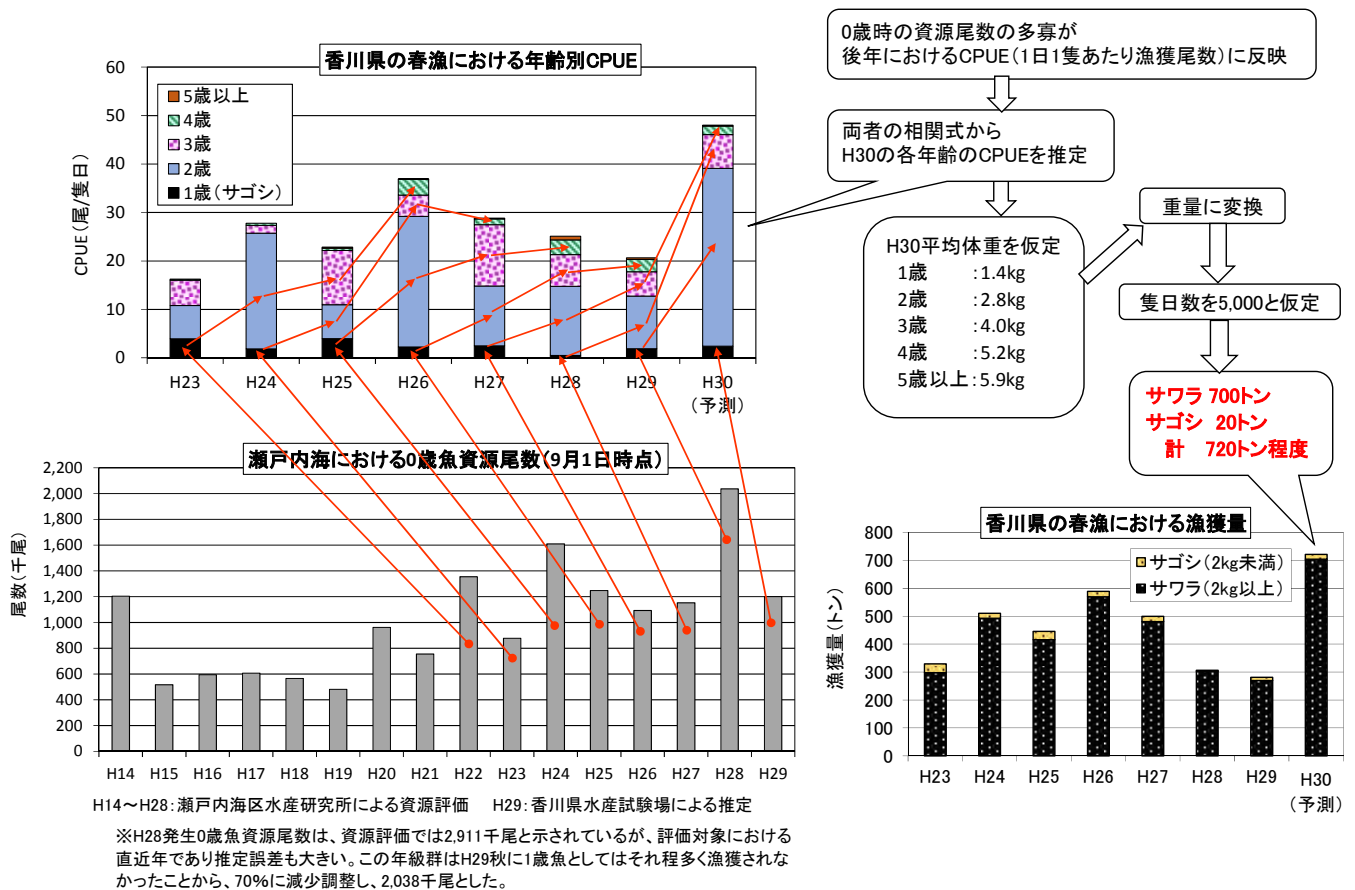


図 3 0 歳魚資源尾数の推移と春漁における漁獲の関係

サワラ瀬戸内海系群の資源評価では、水準は中位、動向は増加とされており、今後 5 年間の予測ではほぼ横ばいの可能性が高い結果となっています。本格的な資源回復の指標として、高齢魚の増加、魚体の小型化と晩熟が提示されており、現状程度の漁獲規制を実施・継続し、できるだけ大型魚を狙って漁獲することが望ましいとの見解が出されています。現状の資源管理の取組みを緩めることなく、今後とも継続することが必要です。